

がんを詠う

歌人母娘の往復書簡

お母さん、なぜ自らの病を

詠い続けるのですか――

〈河野裕子様〉

あらたまって手紙を書くのは気恥ずかしいけれど、お母さんが自分の癌とどう向き合っているのか、いちどゆっくりと話をしてみたくて、手紙を書きます。

お母さん、あなたが乳癌の診断を受けたのは、二〇〇〇年九月二十二日（金）、五十四歳のときでした。その二日前、お風呂上りに左腋にしこりがあるのに自分で気づき、「これ何やろ?」と父（永田和宏・歌人、京都大学再生医科学研究所教授）に触れさせました。父が病院の予約をとりに、とにかく診てもらうことに。病院ではすぐに乳腺外来へまわされ、エコー画像を見るなり「悪性です」と言われたのですね。私は当時、大学院修士二年の学生でした。大

かわの ゆうこ
河野裕子

（歌人）

なが た こう
永田紅

（歌人・京都大学博士研究員）

学の建物の階段で、父からの電話を受けたのを覚えています。日本人の二分の一が癌にかかる時代だとはいえ、それまでの私たちには他人事ではなかった「癌」という言葉を聞く私の横を、何人かの人たちがばたばたと通っていました。踊り場に木の葉が吹き込み、床の上で回っていました。九年前のあの日から、私たち家族の生活はずいぶん変わりましたね。

明日になれば切られてしまふこの胸を覚えておかむ湯に
うつ伏せり

河野裕子

十月十一日（水）、お母さんは京都大学附属病院で手術

を受けました。左乳房の温存手術。腋窩リンパ節郭清。ステージはⅡとⅢの間。診断から手術までの三週間足らずの間に、どのような心構えがあったのか私にはわかりませんが、年齢に関係なく、女性が胸にメスを入れられることに抵抗がないはずがありません。ただ、私は何をしてお母さんが助かることが第一で、どのように切ることにしたとしても、一番最後のよい方法をとってほしいと思っていました。そうはっきりと言っていたことは、あるいは、同性としての思いやりに欠けていたかもしれません。けれど、生きのびること、生きていくことができることが大事。

お母さんは、自分の両親に癌のことは隠すことにしましたね。高齢の二人は、癌と聞いただけで、心配のあまりおかしくなってしまおうと思ったから。一番心配してほしい人から隠しつづけたストレスを思います。二人はどうとう娘の癌を知らないままに亡くなりました。仕事のことでも考えて病氣は公表しないほうがよいのではないかと家族で話しましたが、あなたはやはり正面から病氣を詠むことにしました。それはどんな力になっているのでしょうか？

癌は、切っておしまい、の病氣ではない。切ってからが病氣のはじまりだと言います。一生、転移と再発の不安がつきまとう。毎年九月の終わりに、無事にその一年を過ごせたことを誰ともなく口にしました。五年を経過したときには、やれやれひとまず五年、とほっとしたものです。

乳癌は、きれいに治ることもあれば、しぶとく、五年、十年、十五年経ってからでも再発すると聞き、油断できないことはわかっていましたが。

二〇〇八年七月、術後八年ちかく経っていた乳癌の肝転移が見つかりました。もうそろそろ大丈夫かな、という気分になり、家を建て替えることにして仮住まいに移った矢先でした。私が四年間の東大での研究員生活を終えて、ちょうど京都に戻っていたのがせめてもの幸いでした。夏に入りゆく明るい季節に、ご飯を食べながら、車を運転しながら、職場の大学のトイレで、夜眠る前、何度泣いたかわかりません。「こんなことなら、建て替えなんてしなればよかったな」とぼつりと父が言いました。

庭一面にコスモス育て母の病む日にち薬の効かざる病

永田紅

転移・再発後の平均余命のデータを見ると、時間がなまましく迫ってきます。学生のころは研究室に入り浸っていましたが、このごろは仕事が終わるとできるだけ早く帰宅するようにになりました。家を離れて仕事をしていると、お母さんと過ごさなければ、と居ても立ってもいらなくなるから。

二〇〇九年十一月七日

手術したときからはじまる病氣

へ永田紅様

おてがみありがとうございます。家族が私以上に事態を把握し、心配してくれていることを、しみじみと感じながら読みました。

あなたが書いているように、二〇〇〇年九月二十日の夜中、お風呂からあがって、左腋の下に卵ほのかたまりが幾つもあるのに気がつきました。書き物をしていたお父さんに見せると「良性のものだろう」と香気な返事。あの人はいつもこうなのです。自分が丈夫な生まれつきなものだから、身体のことには無頓着で能天気。

わたしも卵ほどの大きさだけど、大したことはないだろうと、気楽に受診したのですが、京大病院の稲本俊教授が、エコーの映像を見て振り向き、即座に「悪性です」と言われたときは、事態がまだよく分かっていなかった。けれど、真つ黒のエコーを見て、ああ、これはいけない全摘出だろうと覚悟しました。

人間って不思議なものです。抜き差しならぬ現実を前にしながら、わたしは上の空でした。それだけ、ショックが激しかったのだらうと思います。家に帰らうと思って、病院横の道を歩いていると、むこうから永田和宏がやって来ました。彼とは四十年余り付きあってきましたが、あんな

な顔をしてわたしを見つめたのは初めてのことでした。立ち止まって何も言わず、ただわたしの顔を見つめていた。

いたましい者を見る眼でした。薄いページジュの縞柄のカッターシャツを着ていました。その後、あまりにうとましいので、そのカッターは処分してしまったのですが。

あのとき、彼と何を話したのか全く覚えていません。ほとんど何も言わなかったのかもしれませんが。

鴨川沿いに、岩倉の家に向かって車を運転しながら、涙が止まりませんでした。世の中が一瞬にして変わってしまった、何をどう考えたらいいのかわからないでいる心の替わりに、涙が出てくれたのかもしれませんが。九月の、すっきりと晴れた日で空気が澄明で、遠くの北山が藍色に透きとおるように見えました。川端通りの並木の緑、その下草のイネ科の風草やねこじゃらしのそよぎ。鴨川の水のきらめき。屈託なげに出町柳を歩いたり、自転車走り回っている学生たち。この世がこんなに美しかったとは。こんなに活気に満ちている所だったとは。ああ、明る過ぎてまぶしい。あの時のわたしは、死の側からこの世を眺めていたのだらうと思います。

でも、幸か不幸かわたしには泣いている暇はありませんでした。締め切りすぎの原稿が幾つもあつたし、鳥取での講演、「NHK短歌」の原稿とテレビ収録、幾つもの新聞と「塔」の選歌に加えて日々の雑多な家事。ちょうど歌謡「歌壇」にあなたと「日付のある歌」（二日必ず一首以上作

るという一年を通しての連載)をしていましたね。

病気のことを歌にするかどうか。家族は心配していろいろ言ってくれましたが、私の気持は、初めから決まっていた。わたしは、歌を作るときは、世間体などいっさい顧慮しないで、自分を全開して作って来ました。だから、今までのように行く。それしかない。隠し事をしたり、自分に正直に言葉を使わないと、言葉が濁る。

しかし、生身はわたしの意思などお構いなし。手術すれば何とかなるなんて、とんでもないことでした。乳癌は手術したときから始まる病気だと思い知らされました。

手術の前日の夜中過ぎまで原稿書きをしていて、入院の手続きの書類書きや日用品の用意は、その日の朝になってしまいました。下着や石鹸を袋に入れながら、これから何度こうして入院の準備をすることになるのだろうと思いました。

手術は三時間くらいで終わりました。麻酔が覚めるまで、永田は執刀医の稲本教授から、摘出部を見せてもらっていたそうです。

わが乳の癌のかたまりを膿盆に見しは君のみ 見しとの
み言ふ 河野裕子

この歌以上のことを、未だにあの人は言ってはくれませんが、細胞生物学者として、どんな思いでわたしの癌細胞

を見たのでしょうか。研究対象として癌細胞を日夜見てきた人です。自分の妻の、それをなまなましく見たときの気持は、誰にも説明できないし、忖度のしようのないものなのではないでしょうか。同じ分野の研究をしているあなたなら、お父さんの気持にいちばん近いのではないかなと思うのですが。

平成二十一年十一月十六日

〈河野裕子様〉

日常は日常だから生きていける

お返事ありがとうございます。九年前に病気が見つかったときの、「この世がこんなに美しかったとは」という言葉が身にしました。世界は変わらずに晴れたり曇ったりして人々が行き交い、川辺に草がそよいでいるだけなのに。生命にかかわる事柄が身にふりかかると、「この世」というものを鮮やかに本当に感じるのですね。

大学院で私が研究していたテーマは、「癌の多剤耐性に関わるタンパク質の機能解析」でした。癌細胞がいろいろな抗癌剤に対して耐性を獲得してしまう現象があります。その原因となるタンパク質の働きを調べていました。毎日、人間の癌細胞を培養し、タキソールやアドリアマイシンといった抗癌剤の粉を精密天秤で量りとりながら、お

母さんが癌になるなんて、その薬剤がのちにお母さんに投与されることになるなんて、思ってもいませんでした。癌に関わる分野の研究をしながらも、それが実際に臨床で人を助けるようになるにはあまりに遠い道のりがあり、何も出来ない自分がいるだけです。私に出来るのは、手術後に岩盤のように凝ってしまったお母さんの背中に蒸しタオルをあてて、肩を揉むことくらい。

ただ、父も私も、科学的な目で冷静に病状を理解しようとしす。悲観も樂觀もせず、状態を把握し、先生方の治療方針を聞く。そんな私たちを心強く思う一方で、もっと単純な対応を求めているのだろうということも分かっているのよ。それをなじることもありませんね。文献を調べるよりも、検査の数値を見るよりも、黙って生身の体を撫でてほしい、と。

ああ寒いわたしの左側に居てほしい暖かな体、もたれるために
河野裕子

転移は、骨と甲状腺にも見つかりました。自分の体がいかにどうなっているのか分からない不安。手術後八年を無事でいられたのも、思えばラッキーなこと、もっと感謝すべきだったのかもしれない。

お母さんの転移が見つかったから、私は何か楽しいことをするのがいけないような罪悪感があります。家の外で遊

んだり、友人と美味しいものを食べたりする機会があっても、手放して楽しめない。悪いことは言葉にすると本当にやってしまいそうで、言葉を意識してしまいます。歯磨き粉や化粧水の残りが少なくなると、切らしてはいけないうな強迫観念があつて、急いで買い足します。「最後の一葉」みたいなね。科学者のはいくれではあるけれど、また違う次元での心の在りようです。そして、子どものころから二十数年間続いていることですが、毎晩眠る前にお祈りをします。何かの宗教ということではなくて、単純にお祈りをする習慣が私にはあつて（もとはお祖母ちゃんに倣ったのです）、癌がこれ以上転移、進行しないよう祈っています。人に言ってしまうと何だか効き目がなくなりそうな気がするのも妙なのですが、とにかく、家族は本当に心配しているのよ。お父さんも、夜中にひとり近所の真暗な長谷八幡へお参りにいったりしているのです。

お母さんは、とにかくまっすぐな性格で、神経の細さと迫力が混在し、大らかなのに生真面目で、好き嫌いの褒め方も怒り方も激しく、よく言えば芸術家肌、ということになるのかもしれないけれど、周りの人間はけっこう大変です。ともすると精神の均衡をくずすことがありますね。癌になってからはとくに。

病めば人は何故と心を追いつめる 病気は誰のせいでもないよ
永田紅

もつとも身近にいる、もつとも頼りにして大切に思う人間につらくあたるのだとはわかっています。私たち家族は、しんどいこともまるごと抱え込もうとしているので、安心していいのよ。

「裕子さん思ったより元気そう」「知り合いの何々さんは同じ病気で治られましたよ」といったことをこれまでよく言われてきましたね。みなそれぞれに気を遣ってくれているのは充分わかりますが、人前で精一杯明るく振舞っていても、病人が元気なはずがないし、病状はそれぞれに違って他の人のことが自分に当てはまる訳でもない。「そつとしておく」それが何よりやさしいと何も尋かざるこの人は知る」とあなたは詠みました。病人は非常にセンシティブになっていて、人の心が透けて見えるものなのですから。

五年前、私は高度房室ブロックによって心臓が止まりがちになり、何度か意識を失いました。ペースメーカーを植え込んで今は普通に過ごしていますし、癌と比べると病気のうちには入らないつもりですが、突然死もあり得たのだと考えたとき、生死ということを少しは感じた気がします。はじめのうちは、自分が死ねば悲しむ自分はいないのだから、残された者が可哀想だと思っていました。けれど、それから何か月かたったある夕暮れ、窓から入ってくるうす明かりの中で、死ぬとは自分が自分を失うことなのだ、と不意に実感した瞬間がありました。怖いのも悔しいのも

もなく、自分が自分の存在を失うことがただ悲しかった。

生きている奇跡など誰も思わざる暖かき日の芝生の素足

永田紅

そして、日常は日常だから生きていけるのですね。普通に、普段どおりに日々を送る。家に帰ると、お母さんがごはんを作って待っていてくれる。そんな生活をまだ続けていられる今の幸せを思います。

二〇〇九年十一月十九日

紅より

家に病人が出るということは

〈永田紅様

おてがみ、ここに沁みて読みました。正岡子規に「家に病人が出るということは、一国に戦争が起こることと同じだ」ということばがあります。発病して以来、このことばを思わない日はありません。

病人の心身の苦痛のみならず、心配と不安、高額の治療費、煩雑な家事など当事者になってしか分からない負担が家族にかかってきました。そんな中で、あなたが書いているようにわたしに「精神の均衡を崩す」事態が起こってし

まいりました。何かの拍子に、通常のわたしには考えられない感情の激昂がはじまり、そういう自分を制御できなくなりました。

罵詈雑言、物を投げつける、号泣するなど。そういうわたしの被害を最も蒙ったのは永田和宏でした。そして、わたしが壊れてしまっている事に気づかなかった彼もまた、爆発してしまった。一度きりのことですが、ほんとうに家の中で戦争が起こっていたのです。

あの時の壊れたわたしを抱きしめてあなたは泣いた泣くよりなくて

河野裕子

その後、永田と息子の淳さんとあなたは相談して、精神医学者の木村敏先生^{キムラタタカシ}の所に行くように配慮してくれました。事前にあなた方は木村敏先生のことはいっさいわたしには言いませんでした。何も知らずに先生をお訪ねしたのとは良かったと思います。

木村先生の著書は、それまでに何冊か読んでいて、こんなに明晰な方がおられるのかと感心していました。精神医学者というよりも哲学者の著述のような論考の本でした。

先生は、「病名をつけようがないのです、あなたの場合には」とおっしゃいました。「あなたは大地に直結しているから、噴火が始まったら誰も止めることはできません」とも。初めの頃は心がズタズタになり、家に着くと寝込んで

しまうありさまでした。ある日、車を運転して帰る時、ふと気づいたのです。木村先生は誰もが言いがちな正論めいた俗なことをいっさい言わない人なのだと。

木村敏先生のような方を一時間も独占してお話しができるあなたは仕合せだと永田が言ってくれますが、確かにそう思います。先生のなかには人間洞察の深淵があり、その深淵は、しばしば「分かりません」と応える。意味で解釈してしまいがちな、一見賢そうな言葉の嘘臭さ。その認識を踏まえながら「分かりません」が出てくるのを、わたしは何度ふかく納得して聞いたことでしょう。

今思えば、再発がわかるまでの六月から七月の頃がいちばん良かった。京都は源氏千年紀を迎えて、いろんな催し物があり、秋にはわたしまでシンポジウムに駆り出されることになり、何か喋らなくてはならないので、俄か勉強のため、できる限りの講座を受けていました。学生時代に戻ったようで楽しく、いつも最前列に座って受講していました。それから幾らかもしないうちに九年まえの乳癌の再発が分かりました。いつかはやって来ると漠然と予感していたことが現実になってしまった時、わたしは自分でも驚くほど冷静でした。

病院待合室

どの人も一度は泣いたに違ひない様にしづかな眼を眼の奥に収^こふ

河野裕子

その頃、私の母は末期の卵巣と膵臓癌のうえに、大腿部骨折を起こし、手のほどこしような状態でした。あんなに働き者だった母。わたしを叱ったことがなく、どんなことがあっても黙って包んでくれた母。そんな母が寝たきりになってしまった。わたしは、ほんとうは京都のホスピスに入れたかった。何ヶ月もしないうちに死んでしまう母を、点滴で保たせたり、嫌がるおむつをさせるなんてことはしたくなかった。でもそれはできなかった。妹が反対したから。

母への心配と、認知症の母が書けるはずもない難解な文書の並ぶ公正証書の開示、抗癌剤の副作用が重なり、心身ともに参ってしまいました。

季節がいつなのか、今日が何日なのかも分からず呆然と過ごしていたある日、突然「母系」ということばが閃きました。ああ、今のうちに歌集を出さねば。「母系」。それは、短歌を作り始めるずっと前から、約束された歌集だったのだと、こころの一番ふかい所から、わたしを揺すり、鼓舞し、おまえが還る所なんだよと呼ぶ声が聞こえたのです。

『母系』は、息子の出版社青磁社から出すことになりました。そして斎藤茂吉短歌文学賞と迢空賞をいただく恵まれた歌集となりました。「造本装幀コンクール奨励賞」も受け、本は海を渡ってドイツのライプチヒに行くことになりました。「世界で最も美しい本コンクール」の候補作として。

山形県上市市で斎藤茂吉短歌文学賞の受賞の挨拶をしていううちに、ステージに立ったまま不意に絶句してしまいました。そのとき、会場の後ろの方にいるあなたが、涙を拭いているのに気がつき、わたしの病氣のために一番泣いていたのは、紅さんあなたなのだったと思いました。

あなたは小さいときから、わたしに寄り添ってくれました。あなたが小学三年生の夏にわたしたち一家は、永田の留学に伴い渡米しましたが、あの頃から、何もかも話して相談できる人でした。あのときのままのあなた。

平成二十一年十一月二十二日

生きていてほしい

〈河野裕子様

『母系』という名前の歌集を出したように、お母さんにとって、母ということ、産み継ぐということはとても大きなテーマなのです。『紅ちゃんが子どもを産むまでは生きてなければ。それが母親の責任なのよ』ということ、私が小さかった頃から言い続けています。お母さんが病気をする前には、まあそんなものかなあと聞いていました。

けれど、こうして否が応でも時間を意識しなければならなくなつた今、家族の縦の流れというものを思うようになりました。兄には子どもが四人います。上の男の子が小学

四年生で、三歳ずつ離れて、いちばん下が一歳。男の子三人と女の子一人。近くに住んでいるので、よく遊びにきます。賑やかで、みんなかわいくて、どんどん大きくなり、家に子どもがいるとはこんなにも前進力をうみだすものか、と叔母の私はまぶしく眺めています。私はまだ結婚していないし、子どももない。もし私に子どもがあったなら、お母さんの病気のことも、つらさをまた違うふうに受け止められたのではないかしら。兄のように、下の世代を育てながら上の世代の衰えを受け止めるのが、生き物の自然なありようなのだろうという気がします。そして、できることなら、私の子どももお母さんに見てほしい。

前の手紙に、私たちがアメリカで住んだことを書いていましたね。もう二十五年ほど前のことになりましたが、アメリカでのあの鮮やかな二年間を思うとき、家族というものの輪郭が立ち上がってきます。慣れない異国の生活の中で、家族は絵本のなかの熊の親子のように、楽しくあたたかく一緒にいました。あのころの親たちの年齢に、私たち兄妹も近づきました。

家族は常に変容し、更新しつづけるものですが、うちの家はやはりお父さんとお母さんの組み合わせがよかったと思いますよ。お父さんは忍耐強いとても人間の出来た人ですし、お母さんはハチャメチャで面白いし。

病気になることで、悔しい思いもしたでしょう。解決のない、救われない精神というものも、実際あると思います。

す。木村先生の仰った「分かりません」という言葉が私なりに納得される気がします。私たちがどんなに近づこうとしても届かないことがある。けれど、お母さんを包み込むのに、父と私と兄、兄の奥さんと子どもたちも含めて、これ以上の家族はないと思うのよ。

抗癌剤の副作用でごはんがほとんど食べられず、手足もしびれて本当につらそうですが、多くの仕事をこなしていますね。歌を作り、原稿を書き、選歌、講演、そして日々の家事。特に食事を作ることに力をかけています。そこまでしてくれなくていいのに、と思うほどだけれど、ごはんを作って食べさせるということが、すなわちお母さんの原点なのだとも感じます。そんな時、なぜかピーターラビットの絵本の中で、エプロンをしたお母さんうさぎが、風邪をひいたピーターにカミツレのお茶を飲ませる場面を思い出すのです。

しつかりと飯を食はせて陽にあてしふとんにくるみて寝かす仕合せ
河野裕子

「元気でさえあれば、この世はとても楽しい」とこのごろ言いますね。「人生は本当に短い」とも。そして「生きてゆくとことんまで生き抜いてそれから先は君に任せる」と詠みました。生きていてほしい。

ミリオンセラー

『思考の整理学』

の著者、待望の

最新刊

外山滋比古

現代人よ、知識メタボリックから脱出せよ！ 自分の頭で考える

必要なのは、強くてしなやかな本物の思考力だ。
人生が豊かになるヒントが詰まった爽快エッセイ



外山滋比古
自分の頭で考える

定価1470円(税込)

中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

http://www.chuko.co.jp/

二〇〇九年十一月二十三日

歌は遣り歌に私は泣くだらういつか来る日のいつかを怖る

私たちが兄妹がひとつずつ勉強部屋をもらっていたときも、お母さんはずっと長い間、台所のテーブルで原稿を書いてきました。食卓にはいつも歌集や原稿用紙が積まれ、食事のときには端に寄せて場所を作りました。そうやって体力と気力を懸けて短歌をつくってきたことが、お母さんの力になってきました。けれど、あなたは歌人だから意味があるのではないのです。教科書に載るような歌を残すことよりも、講演で人々を元気づけることよりも、もっとも身近な人々を幸せにすることのほうが大事だと思う。私はお母さんを歌人として尊敬するけれど、私にとって大切なのは、お母さんがお母さんであることなのです。

歌は遣り歌に私は泣くだらういつか来る日のいつかを怖る

永田和宏

へ 永田紅様

癌で亡くなる人が三人にひとりという現実を抱えている日本。患者の体の苦痛は誰しものことです。高額な医療負担については、あまり聞かえてこないのが不思議でしょうがありません。

買物に行けば、人参一本買うにも、遣り繰りを考えていました。こちらのお店は十円高いとか安いとか。それが普通の主婦感覚。ところが抗癌剤を使うようになってから、わたしの金銭感覚はおかしくなってきました。

八月の医療費が、四十万円を越えてしまったとき、気分が悪くなってしまう。それなのに還ってくるのは三万幾ら。抗癌剤の点滴を受けると、タクシーを使うように

病むまへの身体が欲しい

紅よりへ

指示されています。点滴のなかにアルコールが入っているから。この頃は、ハーセプチンという抗体薬の点滴のほかにTS-1を服用している為、ほとんど食事ができなくなり、食べることが苦役のようになってしまいました。水も飲みたくない。だから、家族の食事のほかに、わたしに食べられそうな余計なものを買ってしまい、それに結構お金がかかる。

うちは共稼ぎをしているから、何とか持ちこたえていますが、大黒柱のお父さんが癌になってしまった家では、どうしているのでしょうか。ふつうの家では、月々の給料が高額治療費に飛んでしまうのではないのでしょうか。何故、この問題に患者も国も声をあげないのか。

アメリカでひどい喘息にかかった時、あまりに高額な医療費を請求されて、お金のない人は、治療も受けられないこの国はひどいと思いました。日本に帰ってきてこんな思いをすることは当時思ってもいませんでしたが。

永田和宏の生みの母は、彼が三歳のときに結核で亡くなりました。戦後すぐのことで、ストレプトマイシンは、大変高額だったそうです。そのため、会社員の彼のお父さんは必死で働いたそうです。お金がもう少しあれば、助かったかもしれないのに。

お金のことは、考えなくていい。何とかするから。それより、あなたが元気でいてくれるのが何より、と永田が言ってくれます。わたしが受け継ぐはずだった親の遺産が相続で

きなくなった時、「家財産よりも大事な人がゐることが大事、素水^{すみづ}のやうな娘のことば」とわたしは詠みましたね。

このあいだ、化学療法部の先生に率直に訊いてみました。わたしの生存率はどれくらいでしょうかと。しばらく考えておられましたが、図を描いて、五年で一パーセントですと仰いました。今のところ、転移箇所は六、七箇所ですが、これで済むとは思っていません。しかし、生存率に縛られることもあるまい。例外はあるのですから。けれど、病気をしたいことなんか、ひとつも無かった。

病むまへの身体が欲しい 雨あがりの土の匂ひしてゐた
女のからだ 河野裕子

今のわたしを支えていてくれるもの。家族のためにご飯を作ったり、洗濯ができること。最低限の家事しかできせんが。それと、歌を作り、原稿を書き、気のあがっている歌会や講演会で話すこと。人の中に居る時わたしは元気です。歌を作っていると、精神がとても安定するのです。このことに長くわたしは気がつきませんでした。病気をするまでは。それまでのわたしは、締め切りに追われて、無我夢中で作っていただけのこと。

自分を全開し、正直に、実感に丁度のことばで平明に歌う。作らないように作る。それがわたしの作り方であることは今も変わりありません。手術後、心身の状態が極度に

悪くなったときも締め切りは容赦なくやってきました。夕暮れどき冷雨が降り、お腹を空かせた鴨が藪でヒーと鳴いているのを聞きながら、この世は辛いと思いつながら歌を作っていました。予後の最もしんどいときでした。

そんな中で何時間も歌を作りつづけているうちに、ああ、今わたしはわたしを治しているのだと感ずることが何度もありました。

ことばは自分を治してくれる

自分の苦しみは自分で引き受けるしかない。誰に何を言っても、どんな本を読んでも救われることはない。人生には誰にもそんなことが何度もあるでしょう。わたしは、歌を作るといふ表現手段を持っていることを、あの時以来、こんなに強いものはないと、しっかりと思うようになりました。人は死んでも、ことばだけは、時間を越えて生き続ける。そのことばは、わたしのものであり、人びとのものにもなってくれるかもしれない。

歌を作っているときのわたしは強い。誰にも何ものにも慮りはしない。真っ直ぐ。集中しきって、雑念を払ったとき、ことばは澄んでくる。澄んだことばは、私自身のこのころの輪郭と感受性の今を照らし、自分を治してくれるのです。癌になったことを、それらしく歌にして他人の同情や興味を引きたくない。癌になってしまったことは、仕方な

いことでした。食べられなくなったけれど、こうして原稿も書けるし、歩けるし、話すことができる今をたいせつにしたいと切に思っています。遠からず、わたしも子規のように寝たきりになるのでしょうか。そのとき、明晰でいられるか、こころは健やかでいられるか。自信はありません。これらのわたしがどうなっていくのか、誰に分かりません。一日一日を無事に生き渡っていく。それで今は精いっぱい。紅さん、あなたのおてがみは優しく静かな語り口で、私たち家族の今までと、現状を冷静に考えて書かれたものでした。

凹凸の多い、傍にいとハラハラするお母さんを持つて、呆れたり、困ったことだと思っているあなた。でもわたしは楽しかったのよ。ひどく残酷で美し過ぎるこの世は、あまりに短かった。そのことが泣けてくるほど、愛おしいのです。わたしの持っているものは、ひとり娘のあなたに全部残していきましょう。着物も着てね。歌人としてひとつだけ。古典を読んでください。何でもいいから。今はわからなくてもいいから。それが、いつかきつとあなたを助けてくれるでしょう。

遺すのは子らと歌のみ蛸ひぐらしのこゑひとすぢに夕日に鳴けり

河野裕子

平成二十一年十一月二十五日

逝く母と詠んだ歌

なが
た
紅
（歌人）



河野裕子さん



20年ほど前の家族写真。
左から河野さん、永田紅さん、
永田和宏さん、永田淳さん

五十三首

今年ガンで他界した歌人・河野裕子は
家族とともに最後まで歌を作り続けた――



母が乳癌で亡くなったのは、今年八月十二日の夜だった。六十四歳。

暑い盛りで、庭のコスモスが繊細な葉を茂らせ、早咲きの白やピンクが何とか小さな花を数輪咲かせたのを枕元に飾ったところだった。母は毎年、庭にたくさんのコスモスを育てるのを楽しみにしていたが、その庭に面した自宅の部屋で、父と兄と私、そして訪問看護師さんに囲まれての最期だった。

在宅看護に入ってひと月あまり。もはや抗癌剤は使えない段階で、点滴や

モルヒネによる緩和ケアを受けていた。亡くなる二日ほど前から「しんどい、しんどい」と発作的に苦しむことが始まり、少し落ち着くと「このくらいで死ねるのなら」と言っていたものが、ほどなく「助けて、死なせて」と訴えるようになった。モルヒネの坐薬、皮下注射や入眠剤で少しでも楽になってほしいと願うしかなかった。

亡くなる前の日、苦しみの波が静まったあとで、母は「あなたらの気持ちがある……」と、やっと聞き取れ

るほどの小さな声で話し始めた。何を言おうとしているのかと耳をすませる。父が、あつ、と気づく。歌なのである。「こんなにわかるのに」。父が原稿用紙にペンを走らせる。

あなたらの気持ちがこんなにわかるのに言ひ残すことの何ぞ少なき

（河野裕子）

母は枕元に手帳を置き、歌を書きつけていた。薬袋やティッシュペーパーの箱にも書いた歌が残っている。何十

首あるだろうか。なんとかまとめておこうと、自分で原稿用紙に清書をしていたが、その日付も八月七日で終わっている。鉛筆を握る力がなくなっていた。私は、私たちが口述筆記をしていた。

母の最後の歌

一首が出来ると、次々に歌が続いた。

さみしくてあたたかきこの世にて
会ひ得しことを幸せと思ふ

本当にこの世は、「さみしくてあたたかい」。「あたたかくてさみしい」でなかったことが家族にとつて慰めである。若い頃の母は神経が繊弱すぎて、父と出会わなければきつと生きていられなかったような人だったというが、消えてしまいたくなるような人間の生来の寂しきをもちながら、私たちに出会ったことをよしとしてくれた。

八月に私は死ぬのか朝夕のわかちも
わかぬ蟬の声降る
茗荷の花こんなうすい花だった月
の光もひるんでしまふ
心細くこの世の道は続きあむ階段お
りきてありがたうといふ

最後の日々、なぜか茗荷の歌ばかり何首か作った。母の母が亡くなったとき、「みんないい子と眼を開き母はまた眠る茗荷の花のやうな瞼閉ぢ（裕子）」という歌を作っていたから、茗荷の花と病む身のイメージが重なっていたのかもしれない。

三首目の「この世の道」は、自分に残された時間だろうか。自分がいなくなつたあと私の私たちの人生だろうか。「ありがたう」と言うのは誰だろう。どう読んでもいい気がする。そして、

手をのべてあなたとあなたに触れた
きに息が足りないこの世の息が

が母の最後の歌になった。

その後もいくつかの歌の断片が浮かんだが、歌を作り始めると集中し、気持ちが高ぶって休めなくなる。「われは忘れず」という句のあとをしばらく考えたあと、「われは忘れず。うん、歌はもうこれでいい」と思い切った。

「何も悔いることはない」「面白い人生だった」と、母はいつも自分の選択に自信をもっていて、思い切りが良く、そんな母に私たちはどこか甘えていた気もするのだが、母だって死ぬのは初めてでどうしていいか分からなかったはずだ。「置いていかないで」という私たちの言葉に「残していくほうもつらいのよ」と言われたときは、ああそうだと思い知った。「何が起ころうとも驚かない、自分が死ぬことに比べれば」と言ったこともある。誰も、自分が死ぬことを理解することなんて出来ない。

お医者さんに、最後はどんなふうになるかを尋ね、いろいろな可能性を聞いた母は、「お別れはできますか」ということを気にしていた。いつもまっ

すぐ、はっきりものを言ってきた母は、お別れもきちんとしたかったのだと思う。そして実際、とても立派なやさしいお別れをしてくれた。「こんないい子が」「お父さんを一人にしてはいけませんよ。お父さんはさびしい人なのだから。大事にしてあげてね」。父と兄と私、一人ひとりの頭を抱いて撫でてくれた。

私が初めて母の胸元でえんえんと声をあげて泣くと、「ほんとに子どもみたいに泣くのね」と笑った。何年もずっと我慢してきた私は、母の中で泣けたことで少し楽になったと思う。母の死後、兄が「エーンエーンと生きている母にもぐりこみ泣きいる紅を羨しみて見つ（永田淳）」という歌を作っているのを見て、兄はあの時羨ましかったのだと知った。

翌十二日。最期は眠っているうちに苦しまないように、と望んでいたのだが、死に際のこととしてよく聞くように、布団やパジャマが重いと言いはじめ

め、腕時計や酸素チューブをはずしてと言ひ、汗をかき、身の置き所のないような様子である。天井を見る目の焦点が虚ろになったころから、意識はなくなつたのかもしれない。息が浅くなり、止まったが、父が大声で名前を呼ぶと、一度吹き返した。耳だけは最後まで生きていけると言うが、父の声は最後にきくと聞こえていたと思う。母の歌の中に、「子より死ぬとき伴侶が大事」というフレーズがあるが、その通り。子どもは放っておいても子どもだけれど、伴侶は半身なのだから。

おはやうとわれらめざめてもう二度と目を開くなき君を囲めり

永田和宏

父の歌である。翌朝目覚めると、母の顔は穏やかになっていて、口元は本当に笑っていた。

最後に苦しい思いをさせてしまったことを私は悔やんでいたが、表情によつてこんなに救われることもあるのか

と知った。残された者にはみなそれぞれ悔いが残るもので、父は「もったいも、きれいだと言つてあげればよかった。頑張っていると褒めてあげればよかった」と思い続けている。兄は、「最後まで感謝の言葉を伝ええぬわが手を握りさすり続けぬ（淳）」と詠んだように、息子ならではの口数の少なさで、言えないままになってしまった言葉があつたようだ。ちゃんと伝わっているよ、と思つても、やはり本人たちは取り返しのつかないことのように悔やむものである。

先日、スーパーで買い物をして帰った父は、「本当に一人で行つてしまった」と力を落としていた。母はとにかく家族にごはんを食べさせることを大切にしていたから、夕食の材料を選びながら、今晩は何を食べさせようかと母が何十年も繰り返してきた気持ちに思いが重なつたのだろう。

をんなの人に生まれて来たことは良かったよ子供やあなたにミルク温め

る

何年もかかりて死ぬのがきつといい

あなたのご飯と歌だけ作つて

わが病めば醤油と味噌の割合のわか

らぬ君が青魚を煮る

裕子

意識してわれに料理を教へるな茶の

花白く下向きて咲く

和宏

父の歌には、男性ならではの悲しさが漂う。母は、父の料理音痴と植物音痴について、「秋刀魚と鰯の見分けもできない」「葉牡丹をキャベツと言った」と呆れながらも、実はそう言つて叱るのを楽しんでゐたから、本気で料理を教えようとしたことはないだろう。手の込んだ洒落なものというよりは、お惣菜や、じっくり煮込む料理が得意だった。エビの殻で出汁をとるカレーも、山椒いっぱいタケノコご飯もおいしかった。「意識して」教えられるようになると、お互いに、その後を思わないわけにはいかない。

なんにしてもあなたを置いて死ぬわ

けにいけないと言う塵取りを持ちて

「私が死んだらあなたは風呂で溺死

する」そうだろうきつと酒に溺れて

わたししかあなたを包めぬかなしき

和宏

がわたしを守りてくれぬ四十年かけ

て

俺よりも先に死ぬなど言ひながら疲

れて眠れり靴下はいたまま

大泣きをしてゐるところへ帰りきて

あなたは黙つて背を撫でくるる

裕子

父を残しては死ぬない、と母は言つ

ていた。自分がいなくなれば、誰がこ

の生活力のない人にごはんを作り、世

話をやいてあげるのか。きつとお酒を

飲んでお風呂で溺れてしまうにちが

ない。自分にしか、早くに母親を亡く

したこの人の寂しさを包めない、そし

てそのことがまた自分を支えてきたの

だ、と。

在宅看護を選ぶ

母は、二〇〇〇年に乳癌の告知、手術を受け、二〇〇八年の七月に転移が発見された。私は職場の研究室の暗室で父からの電話を受け、「肝臓に影があるらしい」ということを聞いた。そのとき現像していた実験のX線フィルムは、なぜか捨ててはいけないような気になり、引出しの奥にしまいこんだ。母が生きていられる時間を、手元に留めたいような気がしたのだろう。

もつとながい時間があると思いきいつだって母は生きていたのだから庭一面にコスモス育て母の病む日にち葉の効かざる病

紅

何度か薬を変えながら化学療法を続けていたが、使える抗癌剤の数は減ってゆき、今年の六月、体力も落ちてまったくものが食べられなくなった。二週間の入院となり、「治療」の終了が

告げられた。書類に「末期癌」と記されているのを見るのは、やはりショックなものである。打つ手はなく、良くなることはないという事実は受け入れがたい。どんな状態であっても、末期という響きに家族の気持ちは馴染まない。何日か前には、着物を着て外出もしていたのに、そんな急に。

医療機関で亡くなる人の割合は八割を超え、癌患者ではもっと多いという。今回、在宅看護を選び、最後のひと月あまりを自宅で母と過ごせたことは、私たち家族にとつて、とても有難いことだった。ホスピスの見学にも行ったが、二十四時間体制で自宅に往診してくださるシステムがあることを知り、ぜひとも自宅で、とお願ひした。母の希望でもあったが、一刻も早く母に家に帰ってきて欲しいと私も思った。家は、お母さんそのもののなのだから。お医者さんと看護師さん三人がチームを組み、毎日どなたかが来てくださった。本当にすばらしいチームだった。点滴、痛みのコントロール、清

拭、マッサージ、うがいなど細かく気を使ってくださる。お医者さんが大きなかばんを提げて家に往診にこられるというのは「サザエさん」の昔のことのように思っていたが、ゆつくりと話を聞き、お腹をぼんぼんとたたき、体調を見ながら柔軟に対応してくださるのは、あたたかく懐かしいような医療の場面だった。何より母が穏やかに過ごせたこと、ひと月あまりの間に結構な量の仕事をこなしたのも、自宅だからこそである。看取り続けるといふ仕事の大変さは想像を絶するが、ただ感謝するばかりである。

聴診を受けるは何年ぶりのこと胸と背中をゆつくり滑る 裕子

在宅看護に入ってから、ノートをつけ始めた。何時に薬を飲んだ、何を食べた、何の原稿を書いた、というメモのようなものだが、今見返してみると、一日一日が濃く、重い。9…30起床、桃半分、ミルク一杯。10…35シャ

ワー。11…20点滴開始。15…00先生来られる。その後、年譜の口述筆記。19…00ガバベン一錠……。

その時には意識していなかったし、もっと有意義な過ごし方もあった気がするのだが、亡くなってからの慌しく漠然と過ぎたひと月と比べると、時間の質は明らかに異なる。ひとかたまりになつて区切れなく流れてしまう日常の時間のなかで、一日一日に錘をつけたような日々だった。

「一日一日を大切に」という言葉はよく聞く。その実体がどういうことであるのか、実は今もわからないでいる。何をどう実践すればいいかなんてマニュアルはないし、やれることはやったと言えるほど何もしていない。もっと時間はあると思っていたのだから。ただ、母の傍で、母がお母さんとして休みなく続けてきた日常の雑事をこなすことは、不思議な安らぎをもたらしてくれた。洗濯をし、布団を干し、食事の栄養のバランスを考え、糠床をかきまぜる。母はどんどん優しくなった。

自分でエッセイにも書いていたが、正岡子規の病床日記のように、何々してもらう、何々してくれる、という言葉を使うことが増えたと言っていた。

すこし食べ調子よければこの日々がずっと続くと思ってしまう

母の辺で過ごす七月八月は終わらないでほしい夏休みなり 紅

死がそこに機をうかがふといふことの比喩ならずして点滴つづく 和宏

七秒に一粒落ちる点滴の「ブドウ糖500」最後まで落つや

死に至る前といえども用意しておかねばならず死亡通知書をかく 淳

庭の見える寝室

転移がわかったのは、母ももう大丈夫だろうという気持ちになり、老後のために家を建て替えることにして、仮住まいに移った矢先だった。本来なら、柱や床の木材を選び、壁紙を決め、家が出来上がってゆくのを待つ楽

しい何ヶ月間かのはずであったが、父は「建て替えなんてしなければよかったな……」とつぶやいた。新しい家に一人で住んだってしょうがない。

それでも、新しい木の家は居心地がよく、縁側もお気に入り、母は結局建て替えてから一年半をこの家で過ごした。庭の見える寝室になって、よかったと思う。

ふたりだけの老後のために建てたるにふたりとふ贅沢を沁みて思ふも車でも車椅子でもどこまでも連れていくから ひとりで行くな 和宏
この家に君との時間はどれくらゐ残つてゐるか梁よ答へよ

一日に何度も笑ふ笑ひ声と笑ひ顔を君に残すため 裕子

私たち家族はみんな、歌を作っている。それぞれの思っていることを、会話よりも、歌の言葉によってより鮮明に知ることもある。そして、ああこんなことを思っていたのかと驚く。日常

とは違う深さで見える心の襞^{ひだ}。歌という表現を通して通じ合うことのできる家族は面白い関係ではあるが、これは良いことばかりではない。かけがえのない財産であると同時に、ある意味、残酷なことでもある。

数ヶ月前、「母に時間がまだあればいい」という下の句が思い浮かんだ。母の残り時間を思ったとき、それは私にとつて切実なフレーズだった。けれど、これに上の句をつけて母に見せていいものだろうか。それは母にとつて、つらい言葉になりすぎはしないか。あと何ヶ月、とはっきりわかっていたわけではないが、母が思っているほど時間がないだろうことを、私たちは意識していたから。結局、一首の形にはならなかった。

歌は遺^{のこ}り歌に私は泣くだらういつか来る日のいつかを怖る 和宏
『葦舟』を新幹線に読みしとき隣が寝ていてくれてよかりき
不自然に涙をかむとき背もたれに斜

めに光射していたりき

紅

歌にこめられた家族の歴史

までは。それまでのわたしは、締め切りに追われて、無我夢中で作っていただけのこと。

裕子

紅さんあなたが子を産むまで死ねないの 萩の傍へに佇ちあるあなた

それでもやはり、現実には母が亡くなった今、たくさんの言葉と歌集が残されていることを幸せに思う。そこには、きわめて個人的な家族の歴史が刻まれていて、家族であるゆえの当然の波風は立ちながら、けれどたつぷりと

自分を全開し、正直に、実感に丁度のことばで平明に歌う。作らないように作る。……そんな中で何時間も歌を作りつづけているうちに、ああ、今わたしはわたしを治しているのだと感じることが何度もありました。」

死より深き沈黙は無し今の今なま身の
ことばを掴んでおかねば 裕子

「あなたはきつといいお母さんになるから」と母は言い続けていた。ついに間に合わなかったことが悔やまれるが、こればかりはどうしようもない。けれど、今年の四月に結婚式を挙げ、母が機嫌よく出席できたのが、嬉しいことだった。

める。『葦舟』は母の生前最後の歌集となった。新幹線で読んだとき、私は涙をかむふりをして涙をふいたのだったが、品川を過ぎるころ、隣に座った人は眠ったふりをしてくれたのかもしれない。

本誌新年号で母と書簡のやりとりをしたとき、母はこんなことを書いていた。

「歌を作っていると、精神がとても安定するのです。このことに長くわたしは気がつきませんでした。病気をする

母の転移がわかったとき、兄を羨ましく思った。兄には、小学五年生から二歳まで、三歳きざみで四人の子どもがいる。いつ遊びに行っても元気に騒いでいて、かわいい。親を喪う悲しみからの回復は、子どもがいるかいなかで随分ちがうだろう。下の世代を育てながら、上の世代の衰えを引き受けるのが、生物として自然なありようだという気がするのだ。

裕子

わたしらを置いてゆくにはあらざれど待つ人の大きな傘にこの子入りゆく
われらより大事な人となりて欲し長い時間父母としてこの子護りき

母のための婚ならずとも急ぎたり桜の季をよき時として

みんないてよかったという葉洩れ日の声にはならぬ声がするなり 紅

一度は抜けてしまった頭髮も、抗癌

剤を止めてからは二センチほどに生え揃った。触ると赤ちゃんの毛のように柔らかくて気持ちよかったが、髪が伸びるということは、とりもなおさず体内で癌が増殖していることを示唆した。

慰めも励ましも要らぬもう少し生き
てちよつとはまじな歌人になるか
しやうもないから泣くのは今は止め
ておこ 全千秋の夕焼となる
そこにとどまれ全身が癌ではないの
だ夏陽背にせし影起きあがる 裕子

母の癌が分かってから、いつその時
が来るのかと怖れ、ずっとしんどかつ
た。外に出ていても、一刻もはやく家
に帰らなければ、と心は落ち着かなか
った。母が亡くなり、もう怖がらなく
てもいいというのは不思議な感覚であ
る。この十年、喪うことの予感に満ち
た歌を家族は作ってきた。共有した時
間、現在、その後の時間。

一日が過ぎれば一日減つてゆく君と

の時間 もうすぐ夏至だ
きみがゐてわれがまだある大切なこ
の世の時間に降る夏の雨
ひとりになって急に衰へ不機嫌にな
つたと皆が言ふのであらう 和宏
身は失せてことばは残る ひたひた
とわがことになりゆく何年も無し
病むまへの身体が欲しい 雨あがり
の土の匂ひしてゐた女のからだ
死ぬな 男の友に言ふやうにあなた
が言へり白いほうせん花
生きてゆくとことんまでを生き抜い
てそれから先は君に任せる 裕子

「本当に人生はみじかい」

ひと月、ふた月、という単位で時間
が語られるようになり、その長さを過
去に巻き戻して考えてみると、ひと月
前なんてついこの間のことである。先
にそれだけの時間しか残されていない
なんて、誰も実感などできない。

「本当に人生はみじかい。だから伴侶
といつも一緒に居て、大事にしてあげ

ること。家を明るく温かくして待つて
いること。おいしいものを食べて、い
い仕事をして、どこへでも自信をもつ
て出ていくこと」と母は私に言った。

すぐに死ぬ病気にあらず来年の予定
表にいくつか書き込みてゆく 裕子

この歌にあるように、歌人として最
後までよく仕事をした。斎藤茂吉短歌
文学賞の贈呈式では、前年の受賞者が
講演をすることになっているのだが、
五月十六日、母は「茂吉と食べ物」と

茶味求真

静岡茶 掛川産

本蔵 **かねも**



急須「青木木米」

うまい茶は心のゆとり
創業1872年

『そうだ、せめて濃いうまい茶でも飲んで、
人生考え直してみるか。』

試飲茶・詳細は **茶の蔵かねも** 検索

〒436-0079 静岡県掛川市掛川70 Tel.0537-22-3145
Fax.0537-22-3147

題して一時間半の講演をした。自分が食べられなくなり、「食べること」について身にしみて考えることが多かったから。私は去年と同じ客席に座り、一年のめぐりを思っていた。母は人前に出ると百二十パーセント元気。

六月十二日には、小野市詩歌文学賞の授賞式で挨拶をした。体調が気がかりでハラハラしながら私は舞台袖に控えていた。挨拶の中で、あと三冊がんばって、茂吉と同じ数の歌集を出したい、そのためにあと三年欲しい、と絶句しながら話した。舞台袖のスタッフの人が涙を流していた。「また一つ賞状をうけさらにまた小さくなれる母と思ひぬ（淳）」。母親というものは、ある時ほんとうにはかなく小さくなってしまう。

その翌週には、父と二人で二年間続けていた京都新聞連載の最終回のために、自宅で対談をしている。『京都うた紀行』として本になるのだが、その「まえがき」は、亡くなる十日ほど前に私が口述筆記をしたものだ。二階の

和室での、あの午後の二人の時間を思う。母といえど、新聞歌壇の投稿ハガキの束を繰って、選歌をしている姿を思い出す。在宅看護に入ってから、ベッドの上で選歌をし続け、ハガキが枕元や床の上に散らばっていた。

母自身も私たち家族と同じように、自分が死ぬことを実感できなかっただろう。亡くなる前日、「わたし死ぬの？」と聞かれた。どう答えようもなく一瞬つまってしまったが、どうしてあのとすすぐに、「ううん、大丈夫」と言えなかったのだろう。

可笑しかつたね死んだわたしにさう言はうまだ魂がふらついてゐたらさやうなら　きれいな言葉だ雨の間のメヒシバの茎を風が梳きゆく死に際に居てくるとは限らざり庭に出て落ち葉焚きある君は喪の家にもしもなつたら山桜庭の斜りの日向に植ゑて

裕子

家族だけの葬儀を終えたあと、残さ

れた私たちはそれぞれ慌しく過ごしている。日常の雑事にまぎれていると、母は今すこし家を空けているだけ、という気がしてしまうのだが、先日、勤め先の大学の研究セミナーで、スクリーンに映された棒グラフをぼんやりと眺めていたら、不意に涙が出てきた。話そうと思っても、もういない。母から私の携帯に電話がかかってくることももうない。「大丈夫」と言っているときににはどうしたらいいのだろう。どこかがとんでもなく抜けていて、しかしおそろしく真っ直ぐな迫力と直観力を持ち、いつも自分を全開しながら生きてきた人だった。亡くなってもう少し時間がたち、これから底なしの本当の寂しさがやって来るのだろうと怖れているが、母が亡くなったあと、私に母が入ってきたような、ふしぎな感覚を覚えている。これからはそれを育ててゆくしかない。

ドクダミの季節になればドクダミの葉を干して母という日向かな　紅

り、文化でもある。このままデジタル化の進展と音楽の幼稚化というダウンスパイラルが進めば、日本の音楽は決して芸術の域には育たない。JASRACが守る著作権は、そのための入り口ともいえる。聞き手がデリートできない音楽が一曲でも多く生まれる土壌を育めるよう、世界中を飛び回って仕事をしたいと考えている。

これから母はいない

永田 紅 (歌人)

八月十二日夜、母（歌人、河野裕子）が亡くなった。六十歳の誕生日を迎えて、間もなかった。十年前に乳癌の手術をし、二年前に転移が見つかった。庭一面に咲くはずだったコスモスを楽しみに

していたが、今年は家族そろって見ることはかなわない。転移後の二年間、薬を変えながら化学療法を続けていたが、この六月にスイカ一切れを食べただけで吐き、食事をとれなくなつて緊急入院となつた。全身の状態が悪くなり、もはや抗癌剤が使えない段階だつた。そのほんの何日前には、着物を着て小野市詩歌文学賞の授賞式に出かけて挨拶したり、新聞の対談をこなしたりしていたのに。

自宅での在宅看護を受けることになり、七夕の日に母は家に帰ってきた。母が帰ってきてくれたことが、私はとても嬉しかった。家は、いつもお母さんがいる所なのだから。母は、根源的な「お母さん」「おふくろ」の豊かさもつ人だったと改めて思う。理屈ではなく、大きな袋に、夫も子どもも飼ひ猫も野良猫

も一緒に放り込んで丸ごと可愛がる。とくに私の父は、早くに母親に死に別れてお母さんの記憶のない人なのだが、母がそんな寂しさを十分に包んでくれたのだろう。家族にご飯を作つて食べさせることを大事にしてい

て、自分がいなくなつたあと、「何を食べるんやろう」と父を可哀想がつて泣いた。亡くなる日の午後にも「今夜ごはんは？」と私たちの食事を気にした。「西京漬けのお魚をいただいたのがあるから。お浸しとみそ汁も作つて」と言うとき、「それでいいね」と安心したようだった。母が大事にしてきた糠床は、父と私が毎日かき混ぜている。

ひと月あまり、家での最後の日々を母の近くで過ごした。時間はどんどん減っているはずなのに、傍にいられるということは不思議な安心感

をもたらしてくれた。トマトでも桃でも、何か少しでも食べられて調子がいいと、ひょっとして奇跡的に長く生きるのではないかと錯覚してしまう。咲き上る庭の立葵に、まだ咲き続けていて、と祈る思

いだつた。「可笑しい夢を見て、自分の笑い声で目が覚めた」などと暢気なことを言う日もあった。「自分が病人の気がしない」「どうして泣くの、私が一番元気よ」と言ってくれたが、胆汁の混じった胃液を吐き、モルヒネを欠かせず、月単位から日単位へと状態は悪くなった。

ベッドの上で、新聞歌壇の投稿ハガキを繰って選歌をしていた。いくつかの原稿はパソコンで書いたが、体力がもたず、父や兄や私が口述筆記をした。そのような中で書かれたものに、こんな文章があ

る。

「……ひとつ思うのは、体を病んでいても、歌は健やかな歌をつくりたい。健やかであること。それが、どんな場合にも大切で、ことに、病気をしても健やかであり続けることは、大きな広い場につづく道があることを約束している予感が、しきりにする。」（『塔』八月号）

歌は、枕元に置いた手帳に鉛筆で書きこんでいたが、字が流れて読めないものもある。自分では「ろくな歌ないね、ほんまに」と言っていたけれど、大したものだと思う。ティッシュペーパーの箱や、薬袋にも書きつけた歌が残っている。

亡くなるその日まで歌を作っていた。目を閉じたまま歌の断片を声に出し、私たちがメモをした。「言葉は残る」

ということをよく言っていた。「つまらないことでも何でも、言ったことを書き留めておいてね」とも。

亡くなる前、立派なやさし

刈萱かりかや

中庭にヴィーナス立てり夏館
黒板のラディゲ・コクトー夏の雨
蟬の夏櫛いよいよ枝を張り
人來ると古き簾を巻きあぐる
秋蟬の鳴きつぐ神の前を掃く
二三人藪抜けてゆく踊りかな
刈萱河野裕子さんを悼む
刈萱の先ゆく人を君と見し

山本洋子

抱いて撫でてくれた。

私には生まれたときからずっと母親がいたのに、これからは一生、母はいない。残された者には、みなそれぞれ悔

いお別れをしてくれた。それに、お守りになるような言葉を残してくれた。ベッドに横になったままで、父も兄も私も、ひとりひとりの頭を

いが残る。兄は、自分の出版社青磁社で刊行直前だったムック本『河野裕子』が間に合わなかったことを泣いた。けれど母は、おもしろい人生だ

った、と言ってくれた。母がいらない本当の寂しさは、またこれから来るのだろう。昨晩ズイキを炊こうと思って、母の炊き方を聞いていなかったことに気づいた。

錫に透きて今年も咲ける立葵わたしはわたしを憶えておかむ 河野裕子『葦舟』

国際ペン東京

大会に寄せて

阿刀田高あとう たかし

（作家・日本ペンクラブ会長）

文学の国際交流は常にむづかしい。言葉の問題が立ちだかっているからだ。英語ができればそれでいい、というものではない。世界のいろいろな民族の心の訴えをどう捕らえればよいのだろうか。

今秋九月末、国際ペン大会が東京で開かれる。国際ペン